文化・文芸
bunka@asahi.com
月曜～金曜掲載

女性だけの永眠の地

納骨堂や墓地　各地に広がる

墓地や納骨堂といった「終のすみか」で近年、女性専用をうたうものが目につく。「死後は夫と別の墓がいい」「気の合う独身女性同士で」といった需要があるようだ。葬送をめぐる考え方の変化や「非婚化」のほか、女性の社会進出によって、自分の最後は自分で決めたいとの意識が強まっているという見方もある。

平安時代の歌人、小野小町ゆかりの寺として知られる随心院（京都市山科区）に2015年11月、女性専用の納骨堂「小町堂」が完成した。生涯独身だったとも言われる小町。もともと女性の拝観者が多いこともあり、寺での伝承から、「小町生誕1200年」の記念事業として取り組んだ。

経蔵だった広さ約20畳の建物を3千万円ほどかけ改修。内部の壁面には小町を含む六歌仙が描かれ、289基の納骨壇が設けられた。永代使用料は、80万～120万円。三十三回忌までは僧侶に毎日読経してもらえ、その後は建立予定の専用合祀墓へと移される。

これまで申し込んだ約10人は全員が健在。見学者は近畿圏在住の50～60代が多いが、東京や名古屋からも問い合わせがあるという。

随心院僧侶の高倉寛智さん(34)は「晩婚化が進み、生涯結婚しない人も増えている。『終活』がクローズアップされるなか、小町堂が自分の死後に不安を抱く女性の心の支えになれればと思っている」と話す。

自分一人で眠りたいという希望に応える墓地もある。京都府宇治市の「京都天が瀬メモリアル公園」の広い芝生の一角にプレート型の墓碑が並ぶ。15年にできた女性専用の個人墓「天空葬コスモガーデン」だ。

白い大理石のプレートには名前と星座のマークがあしらわれ、墓石や彫刻・設置工事代込みの費用は50万円から。より小型のプレートは20万円だ。いずれも永代供養墓で、管理費は不要という。

上 随心院の「小町堂」内部＝京都市山科区
下 京都天が瀬メモリアル公園にある女性専用の墓地区画「天空葬コスモガーデン」＝京都府宇治市

「自分の最後は自分で決める」意識

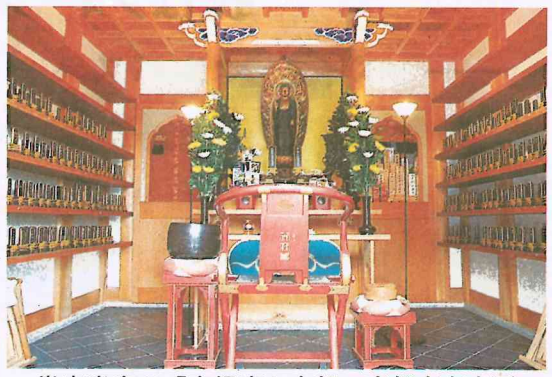
同園では元々、男女問わず入れる個人墓があるが、女性専用の区画を求める声に応えて新たに設けた。契約者には、独り身の人や家族に負担をかけたくないという人のほか、旅行で訪れた京都が気に入ったという人もいるという。

管理事務所の谷山正人所長(49)は「自分の近くに眠るのは同性の方が安心できるという人もいる。女性専用墓の数は全国的に見てまだ多くはないが、自分らしいお墓を選ぶ際の一つの選択肢にはなっているのではないか」と話す。

こうした墓地や納骨堂は東京や千葉、北海道や佐賀などにもできている。

地縁血縁より「志縁」

常寂光寺（京都市右京区）境内にある納骨堂「志縁廟」は、血縁や地縁ではなく志で結ばれた志縁による女性のための納骨堂だ。



常寂光寺の「志縁廟」内部＝京都市右京区

太平洋戦争では多くの若い男性が亡くなり、生涯独身となった女性も少なくなかった。そうした時代を必死に生きた女性がいた事実や平和の大切さを伝えようと、1979年に結成された「女の碑の会」会員のための共同墓として90年にできた。会員以外にも、墓を守る子供のいない夫婦らにも開放され、現在では生前に納められた約1100人分の位牌が廟内に並ぶ。うち200人ほどが亡くなっているという。

長尾憲佑住職(57)は「これでほっとしましたという手紙をたくさんいただいた。安心して死ねるということは、今を安心して生きられるということなのでしょう」。志縁廟の新規募集はしていないが、寺は性別や子供の有無を問わない新しい廟の建立を検討している。

長江曜子・聖徳大教授（墓地・葬送研究）によると、かつての家中心の墓では、はからずも独身となった女性は実家の墓に入るのが一般的だった。女性専用の墓や納骨堂は15年ほど前から登場し、特にここ5年ほどで目立つようになったという。

「経済的に自立した女性が増えて、自分の最後は自分で決めたいとの意識が高まり、その需要に応えるものが供給されるようになってきた」。こうした状況の変化が、長年夫婦として連れ添った女性の「墓は夫とは別に」「夫の家の墓には入らない」という決断を支えている側面もあるようだ。「女性の生涯未婚率が高まるなか、自分にはどういう旅立ちがふさわしいのかと考える人々にとって、女性専用墓には今後も一定のニーズがあるのではないか」

（佐藤剛志）